

イタリア国立ナポリ大学「オリエンターレ」訪問報告

鳥越輝昭

訪問先：Università degli Studi di Napoli “L’ Orientale” (国立ナポリ大学「オリエンターレ」) Facoltà di Scienze Politiche-Dipartimento di Studi Asiatici (政治学部アジア研究学科), Facoltà di Lettere e Filosofia-Dipartimento di Studi Asiatici (文哲学部アジア研究学科)

訪問日程：2007年3月19日、3月21日

訪問者：鳥越輝昭

イタリア国立ナポリ大学「オリエンターレ」のなかで日本学・日本語の研究教育をおこなっているのは政治学部と文哲学部に関わるアジア研究学科（ただし、イタリアの大学の通例で大学院教育もおこなう）である。イタリアの大学は一般にいわゆるキャンパスを持たず、学科ごとに市内の別々の建物に入っていることが多いが、「オリエンターレ」のアジア研究学科も、ナポリ市の旧市街スパッカ・ナポリにあるコリリャーノ館に入っている。このバロック様式、五階建ての館は16世紀に建てられたもので、かつては公爵の館であった。広場をはさんで建つ聖ドメニコ・マッジョーレ教会は、大神学者トマス・アキナスが晩年研究生生活を送った所と聞く。

ナポリ大学「オリエンターレ」の起源は18世紀（1732）まで遡り、中国で活動するキリスト教（カトリック）宣教師養成を目的につくられた神学校がはじまりである。この神学校には外国語学校が併設され、やがてそこではアジア諸地域の言語が教授されるようになっていった。19世紀末、イタリア政府の政策により神学校部門は閉鎖されたが、外国語学校部門は、東洋の諸言語のみならず、世界各国の言語・文化・社会制度などを教授する教育機関に成長、1940年に大学となった。現在は、4学部9学科を擁するイタリア屈指の文化系総合大学として12,000人の学生が学んでいる。

この大学で日本語が正式に教授され始めたのは20世紀初頭（1903）のことで、初代の日本語講座担当者はG・ガッティノーティ（『日本の詩歌』1909の著者）であった。初代日本人講師は下斗米ヒデゾウ（秀造？火山学者）、二代目は下井春吉（詩人、ダンテ研究家）であった。日本語・日本学の教育が本格化したのは1950年代、M・ムッチョリ教授（著書『日本の演劇』1962など）の下においてであった。現在、日本学・日本語教育に携わっている専任スタッフは、G・アミトラノ（日本近現代文学）、P・カルヴェッティ（日本語史）、P・カリオーティ（東アジア史）、S・デマイオ（日本近代技術史）、大上順一（言語学）、の諸氏である。また、東アジア文化史担当のA・タンブレロ教授は、日本学研究雑誌 *IL Giappone* の創始者であり編集長を務めている。

アジア研究学科の図書は、コリリャーノ館内に一括所蔵され、約23万冊の蔵書がある。日本関係書は約2万冊。文学・政治史関係の図書が充実しているが、なかでも帝国文庫版の『西鶴全集』やランゲ『テサウルス・ヤポニクス』のようなやや古い書籍の集書、『岡山県教育史』（全3巻）のような地方史の集書が特徴的であった。

わたくしは、3月19日に、政治学部所属のシルヴィア・デマイオ先生、ならびにレッツェ大学専任で「オリエンターレ」の非常勤講師でもあるカロリーナ・ネグリ先生（日本古典文学）にお目にかかり、「オリエンターレ」の日本学・日本語研究ならびに教育の歴史と現況について話を伺い、学科図書館をご案内いただいた。3月21日には、文哲学部所属の大上先生にお目にかかり、先生からも「オリ

エンターレ」の日本学・日本語研究ならびに教育についてお話を伺った。紙幅が限られているので、概略のみを記している。

現1年生の日本学・日本語専攻者は、文哲学部と政治学部とを合わせて176名である。文哲学部では、3年間60分×8コマの日本語教育を続けながら、2年次以後は日本の文学史・美術史・哲学宗教史など文化研究と組み合わせられてゆき、政治学部でも、各年次の日本語の履修時間が6コマとやや少ないのを除けば、同様に2年次以後の専門教育と組み合わせられてゆく。両学部とも学生は2言語を学習することになっており、日本語専攻者は中国語をあわせて学習するのがほとんどだという。

イタリアでは2003年に新制度が導入され、おおむね学部3年、修士2年、博士3年とってよい私たちの大学教育制度となっている。この学部3年制度は実社会への直結を目指した改革で、これにより学部水準の卒業率が従前より増え、「オリエンターレ」でも5割以上となっている由。学部を終えて修士課程へ進学するのは、政治学部では約半数、文哲学部では2割以下。早稲田大学、東京外国語大学、上智大学などとの提携関係があり、毎年10名程度が日本へ留学するとのことである。

近年、日本学を専攻する学生たちは、入学前から漫画、テレビのドキュメンタリー番組、インターネットなどで日本への純粋な関心を持っている場合が多い。卒業後は、日本留学で日本語力を伸ばしたのち、文哲学部では、通訳・翻訳業、イタリアの日本企業、日本のイタリア企業、観光ガイドなどに職を得る場合が多く、政治学部では企業の他、国際機関などに職を得る場合が多いとのことである。